

審査の結果の要旨

氏名 蘇 睿弼

本論は中国の都市に関する形態論であり、その分類を提案しその意味解読を試みている。

中国では古来、都市全体を城壁で囲むのが普通であり、都市を「城市」と表現することからわかるように、「城壁」と「都市」とが不可分の存在であった。このような城壁で囲まれる形態は近代になって消滅し、現在では往事の形態をとどめている都市は非常に少なくなっているが、現代都市の空間骨格は城壁都市の時代の都市構造の影響を強く受けている。中国都市の形態や立地に関する理解を深めるためには、城壁都市の理解が不可欠であるという認識に立って、本論は城壁都市の計画理念や手法の特徴を把握し、都市の立地条件による形態規定を明らかにし、形態成長のパターンを解明することを目的としている。

研究の空間範囲は漢民族が最も活動した領域の内中国—Inner China（中国本土）とし、この範囲の中の100ヶ所の城壁都市を研究対象としている。

都市形態の基本資料としての図面資料は、戦前の日本軍による測量図から、中国地方史に掲載された絵図、近代中国に関する地図資料、現代中国の都市地図集まで幅広く渉猟している。

申請者は、これら図面資料を相互に比較検討したうえで、各都市の城壁の位置、主要道路のパターン、主要建築施設の位置を特定し、20世紀初頭の城壁都市の形態を復元し、同一のスケールの空間骨格を示す地図を作成している。これとは別に、アメリカ地質調査所（USGS）の数値地図GTOPO30データを元に、各都市の微地形と立地の関係を分析するために周辺半径30キロメートルを含む三次元モデリング図を作成している。

分析作業は、まず、都市形態が方形であるか不整形であるかに分類している。それは、中国の歴代都城の原型を示したとして最も知られている『周礼』の中の「考工記」に書かれた形態が方形であることから、この形態を中国の官制の都市計画のひな形として位置づけたことによる。その結果、方形に属する城壁都市は45例あり主に北部に立地し、不整形に属する城壁都市は55例で南部に立地する。

続いて、対象都市の傾向をつかむために成立年代、立地空間、面積規模と城門について計量的な比較を行っている。

都市の地理的立地に関しては、申請者は対象都市を水系との関連ならびに微地形との関連で分析している。微地形の分析は地面の斜度1度を閾値として（数値地図GTOP030データを使用）、斜面と平坦値に分けた図を作成し、それをもとに考察し類型化している。その結果、方形の城壁都市は谷間型、山麓型、平野型に分け、不整形の城壁都市は蔵風得水型、丘陵臨水型、小山接水型、川辺平地型に分けている。

方形の城壁都市が属する谷間型の城壁都市は河岸段丘に位置し、陸運の交通ルートの結節点にある。山麓型と平野型の城壁都市は微高地、扇状地に多く、行政施設と城壁都市周囲の小山の間に軸線的な関係のある例が幾つかの例に見られることを明らかにしている。一方、不整形都市に属する、蔵風得水型の城壁都市は舌状段丘の麓が多く、丘陵臨水型の城壁都市は大川の合流点に位置することが多く、小山接水型の城壁都市は軍事的な性格が強く、川辺平地型の城壁都市は川沿いの町から発展してきた例が多いとしている。

都市の城壁の平面形態については、方形の城壁都市を、方形の基本型、変形型、複合型の三つの類型に分けている。基本型では、更に主要道路のパターンから3類型を提案している。

これらの形態的な差異を生み出した理由について、申請者は、交通システム、農耕、政治的側面などから考察している。

交通システムについては、方形の城壁都市は陸上交通に、不整形の城壁都市は水上の交通システムに組み込まれていることが多いとし、水運を中心とする南部では、城壁都市の骨格が川の形態に左右され、不規則な曲線になり、陸運を中心とする北部では、城壁都市の骨格が馬車を走る道に左右され、直線になる場合が多いとしている。

農耕との関連では、南部では川の自然堤防に立地する集落で後背湿地を水田とするのに対して、北部は台地に立地する集落で集落の周りを麦畑とする。

政治権力のあり方との関連では、南部の城壁都市では漢民族が常に南への移動を行ったため移ってきた移民を収容するために、常に部分的な改変がなされてきた。一方、北方防衛のために大動員される軍人を収容するために建設された北部の城壁都市は全体的な計画が行われた、としている。

このように、本研究は中国本土の中心部の古代以降の歴史上の都市の全体を形態的に包括的に捉えようという野心的な志のもとに進められているが、実証的な資料に基づいて、抑制のきいた推量で、この方面の研究に着実かつ貴重な一步を記している。

よって、本論は博士（工学）の学位請求論文として合格として認められる。